

審査の結果の要旨

長友洋喜

本論文は、声楽教育の近代化に貢献した代表的な二人の指導者、フレデリック・フスラーとコーネリウス・L・リードの発声指導における「科学的知識」と「実践的知識」の関係を、それぞれの理論と実践に即して探究している。本論は、フスラーの功績について探究した第1部(4章)とリードの功績について探究した第2部(4章)で構成されている。

第1部においては、フスラーが声楽教師として活動を開始した時期のドイツ音楽の背景を記した後、彼が「科学的研究」と「実践的体験」の融合を求め、「体験」を理解する枠組みとして「科学」を活用した経緯が提示される(第1章)。続いて、フスラーが歌唱能力の神秘主義を脱却し、「解剖学的構成」をもつ発声器官の潜在的能力の活性化を歌唱指導の中心目的とし(第2章)、「耳の感受性」を発達させ聴覚が脳によって間接的に発声器官を制御するという仮説にもとづいて、「模倣」の教育的意義を主張したこと(第3章)、さらに、発声訓練において科学的知識が指導の混乱を防止する効用を指摘するとともに、科学的基礎が仮説に過ぎなくとも発声の開発に有効であれば教育実践はその仮説によって探究すべきであるというフスラーの主張が示され、その実例として「アンザッツ」(身体の部位に声をあてる発声法)の指導法が検討されている(第4章)。

第2部においては、アメリカの音楽史の背景、およびリードが17世紀に隆盛を迎えたイタリアのオペラにおける声楽教育を「黄金時代」と認識し、近代科学が声楽指導に「衰退」をもたらしたという認識を有し(第5章)、リードが「音響学的分析」の効用について批判的に検討して、発声の「美しさ」は聴覚の熟達による実践的感覚に依拠すべきことを主張した論拠が分析されている(第6章)。続いて、リードが発声器官の制御は「精神的概念」と呼ばれる音質のイメージによって間接的に可能であると認識し、その有効な方法が「模倣」にあると提唱していたこと(第7章)、およびリードにおいては指導の有効性が科学的実証性よりも経験による確証を優位におく論理で「科学的知識」と「経験的知識」の関係が模索されていたことが、発声指導の実例の分析によって示されている(第8章)。

本論は、声楽指導の近代化における「科学的知識」と「実践的知識」との統合と相克の様態を二人の指導的な実践家の理論と実践に即して詳細かつ精緻に分析し、科学と芸術、科学と経験という対立の葛藤の中で声楽指導法が形成される歴史的過程を、実践者の探究を内在的に照射し解明する方法で描き出すことに成功している。さらに本論は、今日、学校内外に普及し一般化している声楽指導のさまざまな技術の歴史的な由来を示し、それらの指導技術の科学的知識との関連と実践的経験における根拠を示している点においても重要な知見を提供している。

よって、本論文は、博士(教育学)の学位に十分に達しているものと評価された。